

心癒される
巡礼の旅



坂東札所霊場会編・朱鷺書房『坂東三十三所観音巡礼・法話と札所案内』から転載)

坂東札所案内 浅草寺貫首 清水谷孝尚

観音札所巡礼の創始

インドにその源を発する観音信仰は、仏教の東漸にもなって中国、朝鮮、そして日本に流伝した。特にわが国においては、きわめて古くから、また、各時代を通じて観音信仰は継承され、やがて全国津々浦々に至るまで浸透、それゆえに民衆信仰を代表するものとなっている。だから現存するあらゆる仏像の中で、観音像がもっとも多数を占めており、また、観音信仰の縁起や説話のたぐいも多く語り伝えられ、信ぜられている。

この観音信仰の基盤をなす代表的な経典は「妙法蓮華経」の中の「普門品第二十五」であるが、真心をもって一心に観音の御名を称えれば、その音声を観じてたちどころにわれわれの苦悩を観音菩薩は救いたもうとある。そして、その慈悲心のおはたらきが、姿を三十三種に変じての救いとなっているといわれるのである。

この三十三という数に合わせて始められたのが、三十三観音札所巡りである。これは観音さまへの帰依のあらわれのひとつとして行われているもので、したがって札所から札所への祈りの中で救われた人も無数といわれる。しかも永い年月の間に、そこには納経・ご詠歌・笈摺など独特の習俗を生み、現在でも多くの人々によってそれが伝承されていることは、巡礼が国民的信仰であることを物語っている。

では、この観音札所巡りの信仰は、いつの時代から、誰によって創唱されたものであろうか。伝説によれば、巡礼の始めは大和長谷寺の開山徳道上人が養老年間(七一七～二二二)に閻魔大王の勧めによって発願、多くの人々を誘ったことにあるという。だが誰も信じようとしないので、そのままになっていた。やがて約二百七十年後のこと、花山法皇が石川寺の仏眼上人・播州書写山の性空上人を先達として、自ら巡礼なされ、これを中興したというのである。この両者に関する巡礼創始、中興の話は有名で、室町時代の禅僧の語録である『竹居清事』や『天陰語録』などにも明記されており、かなり以前からの伝承であることが知られる。しかも、少なくとも江戸時代まで大多数の人がこれを史実として疑わなかったことは特筆すべきことである。

坂東札所の歴史

花山法皇とのゆかり

坂東札所のうち約十カ所に及ぶ霊場の『縁起』が花山法皇が巡って来られ、札所に指定されたと記している。たとえば永禄三年(一五六〇)に書かれた『杉本寺縁起』には「永延二年戊子の春、忝も法皇御順礼の勅命有て、当山を以て坂東第一番と定め御順礼有り、夫より今に至るまで貴賤の順礼絶せずとなり」と記されている。

坂東札所そのものが、どこまでも西国札所に倣って行われたものであることが示されているともいえる。いわゆる西国札所の地方移植の一つが坂東札所なのである。

源頼朝・実朝の信仰

西国三十三観音巡礼の信仰が坂東に及び、やがて札所が形成されていったのはいつの頃であつたろうか。いま、その経過を明らかにする史料はないが、直接の契機は鎌倉幕府の成立と將軍家の深い観音信仰にあったといわれている。すなわち頼朝が將軍であつた頃、その氣運が起り、実朝のときに機が熟して制定されたのではあるまいかというのである。

坂東札所が第一番を鎌倉の杉本寺とし、鎌倉・相模それに武蔵に札所の多いこと(これは戦乱によって退転した武相の寺院を保護しようとした頼朝の政策を反映しているが)、そして安房の郡古寺を打ち納めとしているなど、鎌倉居住者に巡拝の経路が好都合になっているなど、鎌倉期成立説に妥当性を与えている。この時代、三浦半島あたりから上総や安房へ通ずる海上交通は発達していたので、容易にこの順路は考えられる。

この時期における板東札所の創始を側面から促したのは、関東武士たちが平家追討などで西上した折、直接に西国札所を見聞し、信心を深めたことにあるといわれている。さらにいえば関東武士・土豪の間に、この頃、熊野参詣が行われており、巡礼への気分が高まっていたことも一因といえる。なお、浄土教の関東伝播に対し天台・真言寺院の自衛策の一環として、観音信仰が鼓吹されたのにも由るといえる。

ここで注意したいのは、関東八カ国に散在する三十三カ所の観音霊場を巡拝する者にとって、まず全行程が障害なく巡ることができるという保証である。それには各国が強力な支配者によって統制されていることが必要であり、国から国への旅を無条件で許してくれる政治態勢が不可欠である。その意味からしても、板東札所は鎌倉幕府の成立をみてはじめて可能なことであったといえるのではなかろうか。

一般人の参加

室町時代になると一般庶民の参加が目立ってくる。足利市の鑢阿寺に残されている「巡礼札」には「文明五年六月廿六日、相州西郡濟五郎兵衛三郎、坂東三十三所巡礼」とか「文明九年閏正月六日、武州足立郡芝蔭村、坂東三十三所巡礼・仙助三郎助二郎彦二郎」などとあり、この頃になってようやく関東在住の一般人が坂東巡礼に出たことが知られる。

坂東札所の巡礼には電車とバスを利用すると約十二日間を必要とする。徒歩では四十日かかるともいわれている。今日、これを一回で巡り終えようとするより、何回かに分けて巡る人の方が多いようである。その方が実生活にあって無理がないせいであろう。それには地域的にまとまっている札所を何カ寺かきめて、日帰りか、一〜二泊の日程がよい。

とにかく巡りはじめたら三十三カ所を満願にしようという心がけが何より大切である。三十三カ所の霊場全部を巡り終えたという充足感、生きる力となってあらわれてくるからである。観音札所巡礼によって「こころ」が澄み、そこに「もう一人の自分」を見出すことができるということは、すでに多くの巡礼者が体験し、告白しているところである。坂東札所は、あなたの期待に充分こたえてくれるものを持っている霊場である。

坂東地図

坂東地図上の各札所のボタンをクリックするとその詳細画面にとびます。



第一番 大蔵山杉本寺(杉本観音) 天台宗

〒248-0002神奈川県鎌倉市二階堂九〇三 Tel0467(22)3463

本尊●十一面観世音菩薩 開基●行基菩薩 創立●天平六年(七三四)
●詠歌●頼みある しるべなりけり 杉本の 誓ひは末の 世にもかはらじ

三尊同殿の霊場

美しい自然の景観、それに奈良や京都では拝めぬひなびたみはとけを祀る鎌倉の魅力にひかれてこの地を訪ねる人はまことに多い。いまや、その古都としての静けさも破られてしまったかと嘆かれるほどである。しかし、閑寂な雰囲気を保ち続けている寺もあり、そのうちの一枚寺が杉本寺である。鎌倉に来て、この杉本寺へ参る人で、ここが坂東観音札所の第一番霊場であることを知る人は意外に少ない。

鎌倉の鶴岡八幡宮から東へ金沢街道を約一・三キロほど進むと、左手に丘陵が追ってくるが、これが大蔵山、その中腹に杉本寺がある。享保十年(一七二五)建立の山門をくぐつて、多くの参詣者によって踏み減らされた急勾配の石段を登りつめると、茅葺きの五間四面の観音堂が杉木立ちを背に建っている。鎌倉最古の寺らしい枯れきったたたずまいが、まず拝者に心のやすらぎを与えてくれる。延宝六年(一六七八)の再建である。いたる所に干社札が貼られ、また明和・安永・天明など江戸期の「巡礼奉納額」などが長押を埋め、本尊に寄せられたあつい信仰の歴史が知られる。入山料を納めて新しく設けられた脇の表参道から詣でることになる。

永禄三年(一五六〇)書写の『杉本寺縁起』に、天平六年(七三四)僧行基が自刻の十一面観音を安置して開創したとある。のちに慈寛大師が同じく十一面観音を内陣の中尊として納め、天台の法流に属せしめた。さらに寛和二年(九八六)恵心僧都が花山法皇の命をうけて十一面観音を奉安したと伝える。これが三尊同殿の由来である。明和八年(一七七七)沙門亮盛師によって著わされた『坂東三十三所観音霊場記』は、このことについて「坂東第一番と成る事、其の故あらんか。…行基・慈寛・恵心の三師、各々十一面の尊像を作り三体同殿を算れば、三十三の悲願分身にあたる。是れ其の第一番に在て四八の霊場を発く由乎」とみえているのが面白い。

藤原の世の二軀鎌倉の世の一軀
相伴れおはず南無観世音

と歌人吉野秀雄氏が歌っている。

せっかくの参拝なのだから入堂して、ご三尊を拝していただきたい。

ご本尊の霊異

『吾妻鏡』文治五年(一一八九)十一月二十三日の条に「夜に入りて大倉観音堂回祿」とあり、時に別当浄台房が煙火の中から本尊三体を運び出したが「衲衣わずかに焦ぐといへども身体あえて恙なし」と霊験が語られている。この頃から多くの信者を迎えるに至ったのであろう。『坂東霊場記』には、この時に本尊自らが境内の杉の木のもとに難を避けられたので、それ以後、杉本寺と呼ばれることになったとある。

源頼朝は深くここの観音に帰依し、『吾妻鏡』の建久二年(一一九一)の条に「累年風霜侵し、葺破れ軒傾けり、殊に御燐愍有って修理を為す」とみえており、寺運の再興につくし、そのうえ前立本尊も納めている。建暦二年(一二二二)将軍実朝も参詣している。この寺には信仰心のない者が寺の前を乗馬したままよぎると落馬するという伝えや、のちに建長寺開山大覚禅師が袈裟で尊顔をおおったら、そのことは止んだので下馬観音・覆面観音といわれたなど、いかにも当時の武士たちとつながりの深い話である。

本堂横の五輪塔群は南北朝時代、北畠顕家との戦乱でたおれた斯波一族の供養塔で、わびしげに互いにそりよって建っている姿が杉本寺に一層の静けさを与えている。歴史の多くはこのように目立たない一隅に、その真相を伝えているものだ。

- 主な法要行事 四万六千日(八月十日)毎月一日・十八日 本尊護摩供
- 付近の名所旧跡 鎌倉市内の寺社
- 宿泊施設 なし
- 拝観料 一般二〇〇円 小学生一〇〇円
- 納経時間 午前八時から午後四時半まで。



第三十三番 補陀洛山那古寺 (那古観音)真言宗智山派

〒294-0055 千葉県館山市那古一一二五 TEL0470(27)2444

本尊●千手観世音菩薩 開基●行基菩薩 創立●養老元年(七一七)

●詠歌●補陀洛は よそにはあらし 郡古の寺 岸うつ浪を 見るにつけても

観音補陀洛浄土

坂東三十三札所の「総納札所」である郡古寺は、房総半島南端の館山市、その市街から少しはずれた郡古山の中腹にある。この山はスタシイ、タブノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、ヒメユズリ混生の自然林におおわれている。『郡古寺縁起』に「この山は是れ補陀洛山と称すべし、而して観音影向の地なり」とあるとおり、鏡カ浦を俯瞰し、海上の交通者を守りたもう観音さまのお住まいとしての条件をここは十分に備えている。奈良朝末期に日光山が観音のお浄土補陀洛と考えられていたことは、弘法大師の詩文によって明らかである。その頃から関東に補陀洛信仰が取り入れられひろまったのであろう。江戸時代までは観音堂のすぐ足もとまで浦の波が打ち寄せていたという。ご詠歌に「岸うつ波を見るにつけても」とあるのが往時を想いおこさせる。この明媚な風光はこれまでに幾多の巡礼者の心を澄ませてきたことか。しかも、ここが結願の札所、満願の喜びと共に巡礼がそれぞれの感慨を抱く霊場である。

『那古寺縁起』に元正天皇の養老元年(七一七)天皇の御悩平癒のため、僧行基が老翁の告げにより、ここの海中より香木を得て千手像を刻み、祈念したところ、直ちに効験あり、勅願によって山上に伽藍が建てられたとある。因みに行基作と伝える千手観音さまのお像是専門家の推定では、藤原期の華麗な特長を具えているといわれる。樟造で補修部分は桧材であるようだ。今、山上の古屋敷と呼ばれているのがその遺跡である。のちに慈覚大師が止住せられ、さらに正治年間(一一九九～一二〇一)秀円上人に至って真言密教の霊場となったのである。

俗に裏坂と呼ばれるゆるい勾配の参道を進み、まず仁王門をくぐる。そして石畳の参道を藤原期の作と伝える木造阿弥陀如来の座像を祀る阿弥陀堂を拝しながらさらに行く、多宝塔が建っている。宝暦十一年(一七六一)住僧憲長が伊勢屋甚右衛門らと力を合わせ、万人講を組織、勧進して建てたものである。

下層四面に切目棟をめぐらせて、和様勾欄を配した姿は見事であるが、その施工者が地元那古寺及び周辺の大工であったことが注目されている。定型を守りながら新しい様式を取り入れているあたり、棟梁はなかなか意欲的である。

やがて朱塗り本瓦葺きの本堂が八間の奥行きも堂々とその側面を現わす。表参道からならすぐ入堂できるが、この道からは数段の石段を上り左に廻って正面に出る。観音堂の御拝には老中松平定信の揮もうによる「円通閣」の額がかかっている。

里見氏一族とのかかわり

源頼朝がこのご本尊に帰依して七堂伽藍を建立、また足利尊氏・里見義実もあつい信仰を捧げた。特に当山第二十一代の別当は里見義秀であり、二十三代は里見の熊石丸であるなど里見氏との深い関係で寺勢は大いに伸張した。徳川家康の頃には鶴谷八幡宮の別当を兼ね、末寺十五ヶ寺、駕籠側八人衆、三百石を領する大寺となった。寺宝の僧形八幡大画像は当山の隆盛を今に伝えている。

だが元禄十六年(一七〇三)の大震災で堂塔全壊、幕府は岡本兵衛を奉行として、宝暦九年(一七五九)場所を現在地に移して再建せしめた。外陣安置の青桐の千手尊(重文)は鎌倉期の作である。頬にはりをもっておられるきびしい顔に内蔵される生命力を感じとることができる。ご本尊と共に善男善女に拝まれ今日に至っている。なお客殿前の大蘇鉄は古株で、茎が十二本に枝分かれした巨木である。嘉永七年(一八五四)江戸の力士「一力長五郎奉納」との刻名が礎石にある。

●主な法要行事 除夜初詣 節分会 星祭 灌仏会 七月十八日観音祭礼(夏祭り)

八月九日四万六千日 十月大施餓鬼会

●付近の名所旧跡 市内船形の崖観音 館山城

●宿泊施設 大和屋旅館・民宿伊藤荘

●拝観料 無料

●納経時間 午前八時～午後五時

